

# 教育長だより

No. 20

2021年11月30日

## 教育委員の4年間を振り返って

～ 管理職の先生方へ ～

教育委員を務めてくださった立入利春さん(たちいり小児科の先生)から、メッセージが届きました。4年間(H29.11/18～R3.11/17)ありがとうございました。また、任期の後半は、「コロナ禍」で学校園はもとより社会教育施設も含めその対応で大変でしたが、医療の専門家としてさまざまな助言もいただきました。感謝に堪えません。以下に全文を紹介します。

2017年11月より小児科開業医として医師会に属しているというだけでわたくしに白羽の矢が立ち、教育委員がどのような事をするのかもまったくわからないままに、気が付けば市長より教育委員の辞令を受け取ることとなりました。

この4年間で曲がりなりにも終えられたのもひとえに教育長の西村先生をはじめ、他の教育委員様そして関係職員様の寛大なお心遣いのおかげとしか言いようがありません。

西村教育長より教育委員を終えるにあたり市内の各学校園の管理職の先生方に一言寄稿してくださいとのご依頼をいただきました。学校や園の経営や生徒や園児に対する指導を若い先生方にどのように行うかといった内容など文部科学省が嫌というほど管理職の先生方に研修や提案をなされており、それ以上に経験に裏付けされた見識をお持ちの先生方に対して門外漢のわたくしが提言させていただくようなものはまったくもって浮かばないのが実情です。ここは自分が40年の歳月をかけて歩んできた医療現場に置き換えて何か管理職の先生方にお話しておきたいことを考えてみました。

教育委員会が事務を執り行う範囲はスポーツ、文化そして教育と多岐にわたります。

守備範囲があまりにも広く何処から手をつけてよいのやら、自分で分かりやすく解釈するために、学校や園の組織を医療機関に置き換えれば、総合病院のようなものと捉えることもできます。院長が校長や園長で副

院長が教頭や副校長でしょうか。その病院の中に独立した機能を持つ多くの診療科があります。それぞれの診療科がおのこの学年の分けられたクラスと考えればよいでしょうか。当然ながら患者さんは症状に応じて自分の病気をある程度推測して病状に見合った診療科を選択して受診します。診療内容や治療基準や入院基準は個々の科の判断に委ねられています。クラス担任は個々の診療科の責任者いわばその科の部長ということになります。そのクラスの生徒や園児はそれぞれが多様な個性を持った患者さんでしょうか。患者さんたちはそれぞれに心の悩みを抱えている人、心臓に問題のある人、胃腸の調子が悪い人、体の具合は悪そうに見えないけれど何がしか医師に相談したような人、患者さん本人は来院せずに家族が相談に来ている人などありとあらゆる人達でしょうか。日々病院のスタッフは様々な悩みを抱えている人に対峙し、今までに培った経験をもとに、来られた患者さん一人ひとりの身体的、精神的な不具合を早期に見つけ治療に繋げる努力をしています。

院長や副院長は各診療科のスタッフが心置きなく診療できるための最新の医療機器や薬を使えるように体制を整え、スタッフには疲弊しないよう健康面やまた仕事に見合った待遇面にも気を配らなくてはなりません。これは学校や園の運営でも同じことで、教諭が安心して働けるように職場環境を整えなければ、子どもたちの不具合をいち早く見つける事はできません。どうか管理職の先生方は御自身が何時も心身共に健康であるように努めていただき、若い先生が安心して子どもたちに対峙できるようしていただきたいと思えます。校長先生はもちろんのこと、すべての先生方は子どもたちにとってあくまでも先生であり、友だちでも、親戚でも、近所のおじさんやおばさんではありません。ましてや理屈抜きで何でも甘やかしてくれるおじいちゃんやおばあちゃんではありません。子どもたちは何かの訴えを携えて日々やって来る患者さんと同じです。日々の患者(子どもたち)の些細な変化も見逃さずに神経を研ぎ澄まして対峙することが肝要かと思えます。学校経営も病院経営も同じだと考えます。スタッフあつての病院。患者が来ての病院です。収益を上げなければ公的病院といえども統廃合されるか廃院となります。学校経営も同じく生徒や園児が喜んできてくれて、この学校、園に来てよかったと思わせることが肝要です。それぞれの科(クラス)に合った治療方針(教育方針)を立てなければその科の収益が落ちてくるでしょう。いつも廃院になるかもしれないという危機感をもって患者(生徒や園児)に当たるよう管理職の先生方や若い先生方も心しなければこれからの学校、園は存在意義を失うと思えます。